

文芸サロン作品集



2022年7月

シニアネット福岡

(SNF)

文芸愛好会

短歌

水上 幸子 作

「博多山笠」

夏空に「氣負い水」の飛沫立ち猛る男衆の「一番恵比寿流」 迅し

山笠も終わりとる宵今しがた抜け出たばかりの蝉の抜け殻

「夏越の祓」

竹灯り置かるる階段のぼりきて鎮守の神の茅の輪をくぐる

夏越の祓終えてながめるわが街の室見川河口を白鷺渡る



短歌

新川 正恵 作

坊がつるに全天の星を見上げいるこの星の下戦いやまぬ
ウクライナのニュース見るたび辛さ増す恐怖の日々も五か月近くに
ウクライナ瓦礫の山に怯えている今日も戦い終わりの見えぬ
初雛に千代紙折たる人形を添えたる母の思いは今なを
手を振りて出勤する父見送りし1945.8.6その日が最後
父逝きて七十七年目の夏が来たみるに堪えない現世の戦火
陽炎の燃ゆる八時一五分世界初の原爆投下世界史に載る
沖縄が日本に復帰五十年想い及ばぬにそが事実なり
ブナ林に霞の晴れ行く東の間をお浄土のごとき白山芍薬
平和なる日本に在りて何思う七十七年前の広島忘れじ



どういたしましたして……この言葉が消えた。

山本 為三

最近のテレビはやたらとゲストという人が画面に登場する。ゲストは名前ではない。お客さんである。戦争が起きればその戦争の専門家がテレビで解説をする。テレビ局としては自前の解説者がいないと外部の専門家をゲストとして招いて画面で解説をしてもらう。

ウクライナ×ロシアの戦争の場合、防衛省の職員が登場した。大学の教員も招かれた。日ごろロシアの軍事問題を研究している人たちである。なるほどまい。その分析力、知識などは素晴らしい。時間が来ると、テレビ局側が『ありがとうございます』とあいさつをする。お礼の挨拶は当然のこと。ところがこの研究者たちも即座に『ありがとうございます』と言う。これが返事なのか答えなのか、単なる対応か、それとも思わず口走るのかわからない。つまり、画面では「ありがとうございます」が二回続く。

日常の暮らしの中では「ありがとうございます」に「ありがとうございます」で答える場面はあまりない。双方で頭を下げる合う場面はあるが言葉で「ありがとうございます」に「ありがとうございます」が返ってくる場面はないんじゃないかな。

テレビ局に「ありがとうございます」と言われたゲストには「いいえ」とか「どうも」とか「こちらこそ」とか「どういたしましたして」とかがあるんじゃないかな。「いたりませんで」というたしなみのある奥ゆかしい言葉もある。丁寧で品のある言葉である。

テレビ局としては、お忙しいところ時間を割いてきていただき感謝しています、の「ありがとうございます」はごく自然に出るのだろう。なかなかいい話でした、その説明、分析はお見事でした、の「ありがとうございます」に対してどういえばいいのか。ゲストが発した言葉、情報を物品と見なせば、差し出されたテレビ局は『ありがとうございます』と言い、差し出したゲストは「どういたしましたして」というのが常識であろう。

ゲストのほうの、ありがとうございますはいったい何なのか。どんな気持ちで「ありがとうございます」を發しているのか。本人に聞いていないが相手につられてつい……なのか、自分をゲストと呼んでくれたお礼なのか、専門家として評価してくれた感謝の気持ちなのか、国家公務員は税金で研究させてもらっているのでその感謝の表れなのか、はたまた出演料に対するお礼なのか。別に深い意味はなくとっさのやり取りですよ、なのか。

言葉がやせてきた、ありがとうの安売り時代なのかな。心からの感謝、衷心からのお礼にはそれなりのことばの抑揚と感情がある。いまはえらく愛想なしの「ありがとう」になり果てている。

プロ野球好きの野球音痴

山本 為三

ジャイアンツはセリーグでソフトバンクはパリーグ、がセ・パにどういうチームがあるのか即答できない。ましてチームのフルネームも言えない。東京読売ジャイアンツと書いていたら正式名には東京はつかない。東京がつくのはヤクルト、東京ヤクルトスワローズ、というそうなの。千葉ロッテは千葉ロッテマリーンズ。目下活躍の選手の名前、これも知らない。

テレビのスポーツニュースで取り上げられる選手もなんで取り上げられるのかわからない。明らかにプロ野球音痴である。かなり重症である。球種は直球、カーブ、ドロップ、シュートが精いっぱい。今はそんな呼び方をしないらしい。

少年時代は阪神ファンだった。大阪生まれの大阪育ち、身の回りには阪神ファン、阪急ファン、南海ファンがいた。みんな熱狂的なファンだった。テレビのない時代、もつばらラジオだった。1949年昭和24年、スポーツ新聞としてスポーツニッポン、今のスポニチが創刊された。親に無理を言って購読した。子供5人のサラリーマン家庭。両親はよくこの無理を聞いてくれたものですね。そのくらい阪神タイガースに熱中していたのかな。

近くに本堂保次という阪神の二塁手がいた。堅実で頭腦的プレイと言われたらしい。この本堂が小学校でのおっさんたちの軟式野球試合にひよっこり出てきた。ものすごいホームランを打った。びっくりしたことを覚えている。

若林、梶岡、土井垣、別当の時代である。いささか地味な本堂はスター選手ではないが当方はその出身校、体重、身長などはそらんじている。

それが今や絶望的なプロ野球音痴、しかし野球そのものは好き。BSテレビ番組の「球辞苑」に凝っている。この番組はプロ野球の技術と心理を教えてくれる。

ピッチャーの投球技術。ボールの握り方。ボールの縫い目と指の関係、そんな

に深い関係があるとは。しかも人差し指と中指の間隔、広げたりちぢめたりするらしい。投げるときボールをどのように手から離すか。指先で離すか、指先のどこで離すか。どこを選ぶか、その一瞬の判断の違いで球のスピードやコースが違うという。これみんな「球辞苑」で聞いたり見たりした知識。

なにしろ草野球出身、いやそれも中途退学、とてつもなく高度で驚くべき技術、そこまですて研究しているのか。ただただ敬服。

技術を磨いている？ 当たり前のことをことさらに言うな、ボールの縫い目と指との関係みんな知ってるよと、叱られそうだ。お許しあれ。

元ジャイアンツの鹿取義隆投手、マウンドで肝に銘じていたことありますか、との問いに即答した。「野手に防げないことは相手打者にさせない、それは三つ。フォアボール・デッドボール・ホームランです」と即答。野手も技術を磨いている。いくら磨いても投手がこの三つをやすやす許したら水の泡、試合に負ける。そんな覚悟で投手は試合に臨んでいるのか、すごいな。

ランナーが出塁する。野手と雑談風におしゃべりをする光景がある。緊迫したゲームでも選手同士は案外リラックスしているもんだ。と思っていたら、「球辞苑」では、しゃべりながら野手は相手の性格をじっくり観察、今後この打者が打席に立った時の自分の守備位置を決めるのに参考に使っているという。グラウンドの上ではうっかり雑談もできない心理戦が潜んでいる。



バスの中で。後ろの席におばあちゃんが二人。二人ともマスク。コロナって厄介なものですねという話をしている。しゃべり手と聞き手、しゃべり手はよくしゃべる、聞き手はうなずき専門みたい。しゃべり手はコレラ、コレラと連発。聞き手はうんうんとうなづくばかりで訂正しない。年恰好からみてコレラのほうが身近、子供の頃のコレラ騒動を見聞きしたのかも。

誰かがコレラじゃなくてコロナでしよと、言っただけなのにこのおばあちゃん、コレラと言いつづけるだろう。おしゃべりに熱がこもっていたのでこちらも遠慮して訂正の口出しはナシ。

黒柳徹子さんは汽車汽車しゅっぱしゅっぱの童謡で、煙を吐いてというところをてつきり煙を履いてと書いていたと告白していた。この人らしい連想の豊かさを感じさせる勘違い話である。たしかに汽車は上に向けて煙を吐くが機関車の下の方では地面に向けて白い蒸気を勢いよく吐き出す。徹子さんは下に注目し、蒸気を煙にした。機関車の下の部分で白い蒸気が出ているのは、たしかに機関車が煙を靴みたいに履いているといっても大間違いとはいえない。子供は自由に発想する。夢多き乙女の徹子さんらしい話である。

この徹子さん、曲者を曲がりものと読んでいたとも漏らしている。あの徹子さんだからこそ堂々と勘違いを告白できる話でもある。

童謡で有名な勘違いはふるさととうさぎおいし、である。うさぎ追いつ、これをおいしい、食べるとうまい、おいしいと勘違い、あの優しそうな小動物の兔からの連想かな。負いし、背中に背負うとの誤解もある。かわいいから背負った、生け捕りにしたから背負って家に持ち帰る、いかにもかつてのふるさとにあつたかもしれない光景が目には浮かぶ。

童謡、赤い靴の異人さんに連れられて行っちゃった、の異人さん。よいお爺さん、いい爺さんの勘違い。うさぎ追いつと同様、この勘違いも多いという。

勘違いや言い間違いを、きまじめに指摘するのはいかななものか。これどういう風に指摘すればよいか、結構むづかしい。時と場所や、相手にもよる。

宮本武蔵の五輪書の読み方、ゴリンのシヨと、のを入れるんですよと職場の若

い後輩から指摘されたことがある。自分の不勉強、無知浅学の誤読である。やりわりと指摘された。一つ勉強ができたと思った。今でもその後輩の名前を憶えている。先輩づらをして得意げにごりんしょと言ったのだろう。

思惑。これをしわくと読んでいた一年下の後輩がいた。2, 3回繰り返すので気になりあれはおもわくと読むとつぶやくように言ってみた。恥をかかせてはいけないと、気遣いながらのつぶやきだった。

任期と人気。若い男女、おしゃべりで、任期満了で選挙を人気が最高潮になったら、選挙があるんだと思っていただけと、勘違いを告白していたという話。誰かがその場で間違いを指摘して一件落着いたらしい。そういう勉強の仕方もあるね。

童謡の勘違い話は家族でやるとワイワイガヤガヤ、談笑、爆笑。腹を抱えて笑い合う一家団欒の楽しいひと時になりますよと誰かが言っていた。



二〇二一年の六月の下旬、三泊四日で道北の旅に出かけた。花の浮島というツアアの冠につられて礼文、利尻の二島がメインの旅である。学生時代にユースホテルと学割周遊券を利用して、ほぼ道内一周の格安旅行をしたが、その時は島には渡っていなかった。道央、道南、道東には、その後何度か訪れていたが、道北は五十二年ぶりである。

花は最盛期ではなかったが、道外では高山植物と言われる花々が、平地でもかわいい姿を見せてくれた。

生ウニたっぷりのウニ丼やホタテづくしの昼食、夜は地元海産物をふんだんに使った海鮮御膳などに満足した。

五十数年前は、列車での移動が大半であったが、今回はフェリー以外はバスの移動である。道路網が整備され、全てが舗装されていた。ホワイトアウトの中を安全に走るための道幅表示ポールが道路脇に数多く立っている。吹雪よけの防雪柵も至る所に設置されていた。この費用だけでも、広いだけに財政難の地方自治体には、重くのしかかることであろう。

これらのインフラのお陰で、一日に二百キロ、三百キロ走っても快適であった。そんな道北の道を走ったり、また礼文や利尻の島に渡ったりして、感じるものがあつた。

手つかずの自然、日本離れした雄大な姿が、五十数年前と変わっていないことである。宗谷岬のように観光地化された地点は別として、殆どの風景は、私の心を癒やしてくれた。初日の日本海オロロンラインや二日目のオホーツク海沿いを走っている時などは、延々と民家もなく続く白い砂浜の景色に感動した。

しかし一方では、寂しいところだなあ、過疎化が随分と進んでいるなあ、と感じた。五十年間に北海道全体で、約二十万人増えたそうだが、殆どが札幌を中心とする道央に集中し、他の地方の人口は減り続けているという。ここ五十年の間に、利尻島の人口は二割になった、鉄道の総距離数が四千キロから二千五百キロにも減少したと聞いた。更に四百ほどの道内の駅のうち、三百が無人駅だと知ると、それほどなのか！ と、北海道の過疎化の凄さが感じられた。

今回の旅は、国境の離島や僻地の過疎化の早さを知らされたと同時に、国の防衛の大切さを痛感させられた。このまま放置したら、北海道は、特に離島は第二の竹島、第二の尖閣諸島のようになるのではないかと、常識はずれの四つの国と近いだけに、ことは重大である。

屯田兵的な制度やスイスの兵役義務制度などを考えるのも大事である、と同時に「自らの国は、自ら守る」の心を、もっと広げねば……と思った。

食の防衛

三 島 武

食の防衛、自給率アップが叫ばれて久しい。今は自給率が四〇パーセントを切るところまで低下している。先進国のなかで最低の数字と云う。由々しき問題である。

主食の米でさえ、作れる田畑はあるのに、作らせない。

戦後学校給食が普及する際、「パンを食べさせずに、ご飯を食べさせよ」と叫んだ先達がいたと聞く。アメリカの政策に、うかつに乗ったがために、減反政策を強いられている。おかしい現象である。

世界で大きな戦争が勃発したら、私たちの食卓の上は、三分の二が無くなることを自覚しなければならぬ。まずは、早々に自給率を六〇パーセントまで引上げねば……と思う。

天気が良い日に、東京の帰りに乗った飛行機から下界を眺めると、一つの小さな窓から、多い処は十箇所以上ものゴルフ場が見える。それほどゴルフ場は全国に多い。これらを全て、作物畑にしても即刻、自給率をアップさせねばと思うほど火急の問題だ。

食べ物が何時のころからか、食品と呼ばれる商品になった。余りにも商売道具に成り下がったように見受けられる。だからこそ、見栄えだ、長期保存だ、コストだ、といっていじくる。が故に安全な食べ物が減っていくことにもなる。また、投機の対象にもなっている。困ったものだ。

最近では、バイオエタノールとか云って、食べ物から油をとっている。昔のように、植物から食用油を作っているのではない。世界で八億の人が餓死寸前にあると言われていのに、人や動物が食べるべきものから、エタノールを取り出し、自動車という機械に食べさせている。誰が見ても可笑しい。即刻やめて、本来の人の口に戻すべきと思う。世界の指導者達（政治家も経済界も）のモラルの問題でもある。

農家の戸別補償制度が始まっている。難しい問題もあろうが、地場の旬の味を大切に、輸入を制限してみたらどうだろう。補償せずとも農家所得は増えると思うが……如何？

自国の国民の食べ物は、国産の食べ物で……。食べる側の私たちも多少の品数が減ること、多少のコストは負担する、との気概と覚悟を持って、自給率のアップを果たさねばならない。輸出品（特に自動車）を売るために犠牲を強いる食料政策を即刻やめるべきだ。これが、食の防衛だ。

ウクライナが侵略されている。これからの世界を考えると、更に危惧するのは私だけであろうか……。

①阿辻哲次氏のエッセイ

漢字学者（京都大学文学部教授、1951年（昭和26年）生まれ）
日経新聞・文化欄掲載（2022. 3. 26）

雑誌を読んでいて「繁華街を彷徨く若者」という表現に出あい、はて、なんと読むのだろうかと考えた。「彷徨」は「ぶらぶら歩く」ことだが、「さまよう」では送りがながあわない。

ふと気づいて、パソコンで「うろつく」と打って漢字に変換すると、画面に「彷徨く」と表示された。なるほどと思つてさらに試してみると、「うろたえる」で「狼狽える」、「わななく」で「戦慄く」と変換された。

パソコンなどがなかったころは、ごく少数の作家などをのぞいて、「うろたえる」を「狼狽える」、「わななく」を「戦慄く」と書く人はほとんどいなかった。だが携帯電話や「電器屋さんで買える便利な機械」が普及し、内臓の「辞書」を活用してひらがなを漢字に換えると、「狼狽える」や「戦慄く」という表記が画面に表示されるようになった。他にも「躊躇う」^{ためら}や「蔓延る」^{はびこ}、「周章てる」^{あわ}という書き方が、雑誌やネットの記事に時折現れる。

電子機器の「辞書」が、本来ひらがなで書くべき和語を同義の漢字に引きあてて、その変換候補として提示する結果そうなるのだろうか、まったく迷惑な話で、^{ふざけ}「巫山戯る」^{ふざけ}のもいい加減にしてほしいと思う。

□ □ □ □ □ □ □ □

たしかに「躊躇」や「狼狽」を国語辞典で引けば、「ためらう」とか「うろたえる」という意味が記されている。しかし、同義語であつてもひらがなで書かれる和語と漢字で書かれる漢語は使われる場がちがひ、両者のあいだには、明白な使いわけがある。これまで日本語の文章を書いてきた人は、身につけた感性に基づいて和語と漢語を使いわけたし、文章を読む側もそれぞれの言葉が持つニュアンスのちがいを正しく理解してきた。もし私が学生時代に課題として出された作文に「セーターがなくて、買うのを躊躇った」と書けば、先生はあきれながら訂正したにちがいない。

書かれる言語としての日本語は世界屈指の長い歴史をもち、そのほとんどが「漢字かなまじり文」で書かれてきた。だが漢字は覚えにくく書きにくい文字であり、特に戦後には「時代おくれのやっかいもの」と認識されたから、そのしが

らみから脱却するべく漢字制限が実施され、それに将来における漢字廃止を見すえたものだった。

しかしそれからあまり時間が経たないうちに、電子情報機器の普及によって、その潮流は完全にくつがえされた。

1979年に東芝が発売した日本最初のワープロは六百三十万円もしたから、とても一般人が買えるものではなかった。だがワープロはあつという間に低価格高機能化し、私は1984年に夏のボーナスをはたいて、机の上に置けるワープロを買った。三十五万円ほどだった。

年配の方は覚えておられるだろうが、昔は、「ゆううつ」を辞書も見ずに書けば、それだけで尊敬されたものだった。だが電子機器を使えば「憂鬱」どころか、

手書きではまず書けない「蹂躪」じゅうりゅんや「嬰鑠」かくしゃく、「魑魅魍魎」ちみもうりょうなどもたやすく文章に使えるし、簡単な操作で印刷までできる。

こうして日本人は難しい漢字を覚える「苦行」から開放され、さらにパソコンが低価格化し、インターネットが普及すると、それまで文章を書くことなどほとんどなかった人が、大量の文章を書きはじめた。

□ □ □ □ □ □ □ □

昭和の末期まで、PTAや町内会のイベントとして「花見の会」や「親睦バス旅行」などをおこなう際には、そのパンフレットを作る担当を決めるのが大変で、会議は揉めに揉めたものだった。当時の人々は学校を卒業したあと文章を書いた経験がほとんどないから皆さん固辞したし、簡易印刷に使われた「ガリ版」では原稿を書いた人の文字の美醜がそのまま出来映えに反映されたことも、揉めた理由の一つだった。

だが現在では、頼まれもしないのに、ありふれた日常的な体験を「ブログ」とやらにまとめたり、友人とランチに出かけたレストランについての個人的な感想などをネット上に「発信」する人々がいたるところに存在する。

もし書かれる文章の質を問われれば、いまは「一億総文筆家時代」と呼んでも過言ではないだろう。

現代の日本人は文章を書く機会が格段に増加した。それは電子機器を使つての行為だが、それでも多くの人が、日本語を日常的に、なんの気負いもてらいもなく書くようになったことは、疑いもなく素晴らしいことだ。実際これほどたくさんの人が、日常生活で文章を書くのは、日本の文化史でも未曾有の現象といえるだろう。

であるからこそ、「躊躇う」や「狼狽える」など、機械から生みだされる日本語の中に首をかしげたくなる表記があつて、それが将来の日本語表記の中に定着することを私は心から恐れる。

文章は機械ではなく自分で書くものだ、という当たり前の事実をしっかりと認識することが、いま切に望まれる。

以上

②漢字学者・阿辻哲次氏 エッセイを読んで

日経新聞・春秋欄掲載 コラム

昭和のヤンキーたちは漢字が大好きだった。「夜露死苦」と書いてヨロシクと読ませ、アイ・ラブ・ユーは「愛羅武勇」と殴り書きにした。「愛死天流」「仏恥義理」などというのもあったそうだ。

すごみを利かせて面々は漢字の持ついかめしさに引かれたのであろう。

▼令和のいま、デジタル空間には往時の比ではないほど難しい漢字があふれている。たとえば「彷徨く」「狼狽える」「戦慄く」「躊躇う」「蔓延る」「周章てる」……。なんだか判じ物みたいでおどろおどろしい。変換するところという表記が現れるから迷惑だと、漢字学者の阿辻哲次さんが先日の本紙文化面で嘆いていた。

▼たしかに、手書きのところに、「彷徨く」などという表現を見かけた記憶はない。それが、ネット時代に入って誰もが文章をつづるようになり、書き言葉の常識が揺らいできたらしい。SNSへの投稿を眺めていると、慣用句の間違いも目立つ。店のPRで「手ぐすねを引いてお待ちします」と書かれていると、行くのが少し怖い。

▼多くの人が、ふだんから日本語を気負いもてらいもなく書くようになったことは「疑いもなく素晴らしいことだ」と阿辻さんは指摘している。

だからこそ、おかしな表記が日本語のなかに定着することを「心から恐れる」……きょうから新年度が本格的にスタートする。フレッシュャーズの皆さん、そこんところ夜露死苦。

以上

③日経新聞(6・26)文化時評に

戸籍法改正で問われる命名文化。親の愛情は痛いほど分かるが不愉快や面倒を引き受けるのは子ども。〳

光兜 児輝 天 波亜 絆希 音暖 希星 輝星 咲恋 心詩：これは実在する新生児の名前である。それぞれどう読むのか、お分かりだろうか？

答えは：らいと(光兜)、るき(児輝)、しえる(天)、なるあ(波亜)、ばき(絆希)、のの(音暖)、きらら(希星)、きあら(輝星)、えれん(咲恋)、こんず(心詩)：前半五つが男児名、後半五つが女児名だという。

うまく読めずに戸惑う人も多いかもしれない。

近年、こうした読みが分かりにくい名前が増している。極端な例は「キラキラネーム」などと呼ばれ、病院や学校でのトラブルやイジメの原因になりかねないと懸念されている。

どうして読み方が分かりづらい名前が増えるのか、背景を探ると核家族化の進展やインターネットの普及など社会の複雑な環境変化が浮かび上がってくる。大きな要因として挙げられるのが、命名のノウハウを指南する書籍やSNS(交流サイト)の存在だ。

かつて祖父母ら親族と同居した大家族の時代には、子どもの名付けは皆で相談することが多かった。だが今の親は自分の好みの名前を付けることを優先し、祖父母らに介入されることを嫌う。そんな親たちが専ら参考に行っているのが名付けのノウハウ本やネット検索なのだ。子どもたちの幸せを願わない親はいない。だが不愉快や面倒を引き受けるのは子どもたち。「命名文化」を問い直す契機にしたい。

以上